

國學院大學學術情報リポジトリ

『源氏物語』空蟬の出自：
桐壺帝への入内の可能性を始発として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 春日, 美穂, Kasuga, Miho メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000196

『源氏物語』空蟬の出自

— 桐壺帝への入内の可能性を始発として —

春日美穂

はじめに

『源氏物語』「帚木」巻の雨夜の品定め翌日、光源氏は妻葵の上の実家である左大臣邸に退出する。しかし、中神の忌日にあたっているため、周囲のすすめもあり、紀伊守邸に方違えすることになる。紀伊守は突然の光源氏の来訪に当惑しつつ、酒肴のもてなしを行う。そうした中で光源氏は、紀伊守や伊予介の子どもたち、とりわけ空蟬の弟の小君に目をとめる。

あまたある中に、いとけはひあてはかにて、十二三ばかり

なるもあり。「いづれかいづれ」など問ひたまふに、「これは故衛門督の末の子にて、いとかなしくしはべりけるを、幼きほどに後れはべりて、姉なる人のよすがにかくてはべるなり。才などもつきはべりぬべく、けしうははべらぬを、殿上なども思ひたまへかけながら、すがすがしうはえまじらひはべらざる」と申す。「あはれのことや。この姉君や、まうとの後の親、「さなむはべる」と申すに、「似げなき親をもまうけたりけるかな。上にも聞こしめしおきて、『宮仕に出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにつむ』といつぞやのたまはせし。世こそ定めなきもの

なれ」と、いとおよすけのたまふ。

〔帚木〕——九五、九六頁¹⁾

空蟬と小君の父が故衛門督であることを紀伊守から聞くうちに、桐壺帝が空蟬の入内の可能性について語っていたことを思い出し、光源氏はふたりに興味を持つ。

光源氏はその前夜の雨夜の品定めで中の品の女性に対する興味を持っており、實際紀伊守を訪れた際にも、「かの中の品にとり出でて言ひし、この並ならむかし」〔帚木〕——九四頁〕²⁾ と思っている。光源氏が空蟬に対して興味を持った背景として、中の品の女性への興味が第一にある。それと同時に、衛門督の娘であり、桐壺帝への入内の可能性がありながら、父の死により受領の妻となった空蟬への「あはれや」〔帚木〕——九七頁〕という同情と興味とがあつたことも描かれている。

以上のように、物語には光源氏が空蟬に興味を持つ過程が丁寧に描かれている。しかし、空蟬との出会いが雨夜の品定め翌日に設定されている時点で、光源氏が空蟬と関係を持つことの背景に、中の品の女性への興味があることは十分に理解され、それ以上の理由は特に必要がなかったともいえる。そうであるにもかかわらず、空蟬が桐壺帝に入内する可能性があつた女性であると語られることには、なんらかの意味があるといえ

るのではないか。しかも、父衛門督が桐壺帝に空蟬入内を「漏らし奏」したことを、桐壺帝自身が光源氏に「いかになりけむ」と語っており、空蟬入内は衛門督のみの宿願ではなく、その思いが桐壺帝に伝わり、桐壺帝本人も気にしていることは注目すべきではないだろうか。

本論では、空蟬が桐壺帝に入内するはずの女性であつたと語られることの意味を始発とし、その出自の可能性について検討する。

一、空蟬の父衛門督

空蟬の父である故衛門督は、衛門督だけではなく中納言を兼務していたことが物語に描かれている。

このほどは大殿にのみおはします。なほ、いとかき絶えて、思ふらむことのいとほしく御心にかかりて、苦しく思しわびて、紀伊守を召したり。〔かの、ありし中納言の子は得させてむや。らうたげに見えしを、身近く使ふ人にせむ。上にも奉らむ〕とのたまへば、「いとかしこき仰せ言にはべるなり。姉なる人にのたまひむ」と申すも胸つぶれて思せど、

〔帚木〕——一〇五頁〕

衛門督は従四位下、中納言は従三位である。中納言位は公卿の一員であり、身分は高いが、大臣クラスとは一線を画する位でもあった。

『源氏物語』中に、衛門督の例は三六例確認される^②。その中には、衛門督に対する身分意識と関わる例がいくつか確認される。

以下の場面は、夕霧が六位に叙されたことを嘆く場面である。

大將、左衛門督の子どもなどを、我よりは下臈と思ひおとしたりしだに、みなおのおの加階しのほりつつ、およすけあへるに、浅葱をいとからしと思はれたるが、心苦しうはべるなり」と聞こえたまへば、（「少女」三―三三頁）夕霧は、自身のおじである大將（かつての頭中將）の息子、そして同じく自分の血縁にあたる大將の弟と考えられる左衛門督の息子を、「我より下臈」と「思ひおとし」ていたにもかかわらず、彼らが五位となり、自身が六位であったことに強い屈辱感を抱いている。確かにこのとき夕霧の父光源氏は従一位左大臣であり、夕霧が屈辱感を抱くことも理解できる。同時に、「大將、左衛門督」の息子を軽視する夕霧からは、「大將、左衛門督」という位そのものを軽視する意識があることも確認でき

る。

次に確認したい例は、柏木が女三の宮の婿の候補からはずされる以下の場面である。

右衛門督の下にわぶなるよし、尚侍のものせられし、その人ばかりなむ、位などいますこしものめかしきほどになりなば、などかはとも思ひよりぬべきを、まだ年いと若くても、むげに軽びたるほどなり。（「若菜上」四―三六頁）

柏木が女三の宮の婿にふさわしくない理由として「位などいますこしものめかしきほどになりなば」、すなわち位がもう少しふさわしいものであったらという点と、「まだ年いと若くても、むげに軽びたる」という点があげられている。しかし、新編全集頭注は「柏木、二十三、四歳であり、客観的には「いと若く」というにはあたらない」（「若菜上」四―三六頁）と指摘している。事実、「宿木」巻で女二の宮の降嫁を受ける薫は二六歳であり、柏木とそれほど大きな年齢差があるわけではない。ただし、この薫と女二の宮の結婚は、「帝の御婿になる人は、昔も今も多かれど、かく、盛りの御世に、ただ人のやうに婿とり急がせたまへるたぐひは少なくやありけん」（「宿木」五―四七五頁）と語り手が評価する異例なものではあった。このことについては、夕霧も「めづらしかりける人の御おぼえ宿世な

り。故院だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか」〔宿木〕五―四七五頁〕と語っている。以上のことを考えると、薫が若年にして皇女の降嫁を受けることは特殊な状況であるといえ、柏木二三、四歳、薫二六歳というほんの数歳の差も影響がまったくないとは言いがたいのかもしれない。しかし、夕霧が述べるように、女三の宮降嫁が朱雀院晩年の、出家を目前とした決断が迫られる時期であったことを考えると、もし柏木が降嫁先にふさわしいという状況があつたなら、数歳の違いは解消することができたともいえよう。³⁾

以上のように、年齢が大きな問題にならないとすれば、柏木が女三の宮の婿に選ばれなかった大きな理由は、やはり位が低かったということになる。薫は、女二の宮降嫁の前に、権大納言に昇進し、右大將を兼ねている〔宿木〕五―四七一頁〕。それ以前の薫は中納言であり〔宿木〕五―四一四頁〕、既に衛門督の柏木よりも身分が高い。家井美千子氏は、「若菜上」巻で、柏木が自分の身分を嘆いた原因となっているのは、右衛門督という官ではなく、参議という官であつたと考えるのが妥当であると述べている。⁴⁾しかし、竹内正彦氏は、柏木の昇進が、光源氏や柏木の父である頭中將、同世代の夕霧にくらべ明確に遅い

ことを明らかにした上で、醍醐朝から一条朝までの歴史上の右衛門督を検証され、右衛門督在位中に死去した人物が多いことや、藤原道長など何人かの例外を除いて大納言以上には出世せず、政治的には不遇な存在であつたことを指摘している。⁵⁾それをふまえると、柏木が女三の宮の降嫁の相手として選ばれなかった理由は、身分が一番の障害になっていたと考えるのが妥当である。そして、空蟬の父が「右衛門督」であつたと描かれることには、政治的に不遇な存在であることが意味づけられているといえよう。

そもそも、大納言の娘である桐壺更衣が、父亡きあとの入内とはいえ、更衣どまりであることを考えれば、⁶⁾衛門督の娘である空蟬が入内しても、皇妃としての栄達はのぞめない。それをあらわすのが、冷泉帝の後宮の様子を記した以下の場面である。

御方々いづれともなくいどみかはしたまひて、内裏わたり心にくくをかしきころほひなり。ことに乱りがはしき更衣たち、あまたもさぶらひたまはず。中宮、弘徽殿女御、この宮の女御、左の大殿の女御などさぶらひたまふ。さては中納言、宰相の御むすめ二人ばかりぞさぶらひたまひける。
〔真木柱〕三―三八一―三八二頁〕

『源氏物語』のなかで、実際に空蟬の父と同じ中納言を父に持つ娘と、宰相を父に持つ娘は更衣であったことがわかる。また、空蟬本人についての記述をみると、父の身分が低かっただけではなく、「言ひ立つればわるきによれる容貌」（「空蟬」一一二頁）であるとしており、容姿によつて帝の寵愛を一身に受けるというのも困難な様相である。

永井崇大氏は、冷泉帝の弘徽殿女御が、実父権中納言（かつての頭中将）の娘としてではなく、祖父太政大臣の養女として入内した例（「滯標」一一三〇一頁）をもとに、空蟬の父が権中納言と同じように大臣クラスに係累がいる人物であった可能性を示唆している。⁷ 紀伊守は空蟬について「この二年ばかりぞかくてものしはべれど」（「帚木」一一一〇五頁）と語っており、空蟬が伊予介の後妻となつて二年であることがわかる。その二年前前後の時期に空蟬を養女にするなどして、空蟬の入内を助ける大臣がいたかということが問題になる。

坂本共展氏は、桐壺帝即位時の大臣補任について、太政大臣が六条大臣（六条御息所の父）、左大臣が桐壺卷左大臣、右大臣が桐壺卷右大臣、内大臣が麗景殿女御父と推定している。⁸ 日向一雅氏も、坂本氏の指摘を受け、「桐壺帝の即位の段階で四つの大臣家がしのぎを削る状況があつたのである」と指摘され

ている。この四つの大臣家のうち左大臣家以外はすでに娘を入内させており、左大臣家も、大宮降嫁、光源氏と葵の上の結婚という形で桐壺帝と結びついている。そのため、空蟬の入内を補佐することが自家のメリットとなる大臣クラスの人物はいなかったと想定される。したがって、空蟬に大臣の係累がおり、入内をサポートしてもらえろという可能性はかなり低かつたといつてよいだろう。

一方、そうした状況にもかかわらず、軒端萩と囲碁をする空蟬の慎み深い様子（「空蟬」一一二二頁）は、前川晃貴子氏が指摘するように、后がね教育を受けていた可能性も垣間見えるのである。以上のことを考えると、空蟬入内は、特にサポートする係累もないなか、故衛門督、そして故衛門督一族のみの、身分不相応ともいえる宿願であり、それがなぜか桐壺帝が知る段階まで至っているということになる。このような空蟬の状況と、空蟬入内について桐壺帝自らが言及しているということについて考えるために、以後、桐壺帝の後宮について検討する。

二、桐壺帝の後宮

桐壺帝の後宮は、確認できる範囲では以下のようになっている。

桐壺帝の後宮

中宮—藤壺 (父 先帝、冷泉帝生母)

女御—弘徽殿 (父 右大臣、朱雀帝、女一の宮、女三の宮生母)

承香殿 (系譜不明 四の皇子の生母)

麗景殿 (父 内大臣?)

更衣—桐壺 (父 大納言、光源氏の生母)

「桐壺」巻冒頭には、「女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に」とあり、実際に螢兵部卿宮の母や宇治八の宮の母などもあるため、多くの皇妃がいたようである。

比較のために、『源氏物語』内の他の帝の後宮についても確認すると、以下のようになっている。

朱雀帝の後宮

中宮—不在

女御—承香殿 (父 右大臣、今上帝生母)

麗景殿 (父 大納言、朱雀帝母弘徽殿女御の姪)
藤壺 (父 先帝、女三の宮生母)

尚侍—朧月夜 (父 右大臣、朱雀帝母弘徽殿女御の妹)

冷泉帝の後宮

中宮—秋好 (父 前坊、前伊勢斎宮)

女御—弘徽殿 (養父 太政大臣 (祖父)、実父 権中納言、のちの太政大臣、朱雀帝母弘徽殿女御の姪、女一の宮生母)

王女御 (父 兵部卿宮、冷泉帝母藤壺中宮の姪)

左の大殿の女御 (父 左大臣¹⁾)

更衣—女 (父 中納言)

女 (父 宰相)

今上帝の後宮

中宮—明石中宮 (父 光源氏、東宮など四男一女の生母)

母)

女御—麗景殿→藤壺 (父 左大臣、女二の宮生母)

朱雀帝、冷泉帝、今上帝の後宮はこのほかに多くの皇妃がいたという描かれ方はしていない。一方、桐壺帝の後宮のみ、ほかにも多くの皇妃がいたと描かれることが他の帝の後宮との相

違点である。特に、多くの皇妃がいた桐壺帝の後宮と対照的なのが今上帝の後宮だ。光源氏が今上帝に明石姫君を入内させることに遠慮して、人々が娘の入内を控えようとした際、光源氏は、「いとたいだいしきことなり。宮仕の筋は、あまたある中に、すこしのけぢめをいどまむこそ本意ならめ。そこらの警策の姫君たち引き籠められなば、世に榮あらじ」〔梅枝〕三—四一四頁〕と述べ、明石姫君の入内を延期している。そうした状況のなか、左大臣の娘である麗景殿女御が入内している。今上帝の後宮は、光源氏によって完全にコントロールされている。桐壺帝の後宮は、皇妃が他の帝にくらべて多いということのほか注目しておきたい点がある。それは、物語のなかで空蟬だけではなく、夕顔、若紫の母もまた入内が検討されていた女君として造型されているという点である。

親たちははや亡せたまひにき。三位中将となん聞こえし。いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど、わが身のほどの心もとなさを思すめりしに、命さへたへたまはずなりにし後、はかなきもののたよりにて、頭中将なん、まだ少将にものしたまひし時見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを、

〔夕顔〕一一一八五頁〕

夕顔が亡くなった際、右近が夕顔について光源氏に語った場面である。夕顔の父、三位中将が「わが身のほどの心もとなさ」を思っていたと語られている。この「わが身のほどの心もとなさ」について、新編全集頭注は「自分の地位の低いことを嘆いていたらしいが。娘を将来できれば後宮に入れたいなどと考えていたか」〔夕顔〕一一一八五頁〕と指摘している。夕顔は入内を検討されながら、父が亡くなったことにより頭中将と関係を結ぶことになったことが示唆されているのである。

若紫の母にも入内の可能性があったことが描かれるのが以下の場面である。

「かの大納言の御むすめものしたまふと聞きたまへしは。すきずきしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」と推しあてにのたまへば、「むすめただ一人はべりし。亡せてこの十余年にやなりはべりぬらん。故大納言、内裏に奉らむなどかしこういつきはべりしを、その本意のごともものしはべらで過ぎはべりにしかば、ただこの尼君ひとりもてあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿官なむ忍びて語らひつきたまへりけるを、もとの北の方やむごとくなくとして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。もの思ひに病づ

くものと目に近く見たまへし」など申したまふ。

〔若紫〕——一二二——一二三三

光源氏が北山の僧都に若紫の素性をたずねると、僧都は若紫の母が父大納言によって、「内裏に奉らむなどかしこう」育てられていながら、父の死により兵部卿官が通うことになったと語る。

空蟬、夕顔、若紫の母の例については、秋澤互氏が「悪くない出自を持ち、両親に愛されるという、将来の展望が至って明るい環境に育ちながら、父親の死亡や何らかの事情によって、その描かれるべき明るい人生の頓挫を余儀なくされる、という一種典型的な人生描出の方法がここに認められるような気がするのである」と述べられるとおりであろう。それと同時に、桐壺帝の後宮が、娘を入内させたいという野望を大臣クラスではない人物達にも持たせるものであったことが浮かび上がる。桐壺帝の後宮とは、他の帝にくらべて皇妃の数が多いこと、大臣クラスではない人物達も娘の入内を希望できる状況であったという特徴があるのだ。

そのことをふまえたうえで、再度空蟬について検討すると、夕顔、若紫の母と違い、空蟬入内については桐壺帝自身が知っていることが違いとしてあげられる。同じように入

内を検討されていた夕顔、若紫の母はあくまで父や一族の願いとして、父や一族のみがその願いを共有しているのに対し、空蟬だけが桐壺帝にまで話が進み、桐壺帝自身も気にしているという点が改めて問題点として浮かび上がる。

三、空蟬入内の可能性の意義

空蟬入内について考えるために、『源氏物語』桐壺帝の准拠とされる醍醐天皇の後宮から、『源氏物語』の成立とほぼ同時代と考えられる一条天皇の後宮の様子を確認すると、醍醐帝の後宮は一人、二人の更衣があり、そのなかには空蟬の父と同じ中納言を父に持つ更衣や、従四位上の右大弁を父に持つ更衣が存在する。¹³『源氏物語』の冷泉帝の准拠とされる村上天皇にも、中納言を父に持つ更衣がいる。しかし、それ以後の冷泉天皇から一条天皇、さらに三条天皇、一条天皇の子の後一条天皇まで確認しても、正式な入内をしている女性の父の身分の下限は大納言であり、それ以外は摂政関白、大臣クラスの娘で占められている。このことに関して今井久代氏は、「醍醐・村上の後宮では、天皇の愛顧を受けた、あるいは実務官僚出身の中級貴族の子女が、多数入内している」ことを確認されたうえ

で、「中級貴族が醍醐村上朝に人事の公平を見た一端が窺える」と指摘される。一方で、そうしたなかでも後宮の中心が藤原摂関家出身の女性達によって構成されていたこともあわせて指摘されている。

このように、時代を経るとともに皇妃の父の身分が上がつていくことに関し、服藤早苗氏は、宇多朝以降、天皇の性は、血縁的ミウチ関係樹立を目的とした関係へとその対象を狭めてきたことを論じたうえで、父母、とりわけ母と天皇を支える外戚たちに管理されていることを指摘される。¹⁵⁾

実際先に確認したように、『源氏物語』の後宮の様子を見ても、母弘徽殿と祖父右大臣による外戚の活動が活発だった朱雀帝は臘月夜を含めても四人しか皇妃がおらず、うち二人は外戚の身内となっている。次の冷泉帝の後宮も藤壺と光源氏によって管理されており、結果的に母藤壺と実父光源氏の思惑のとおり、秋好が中宮となっている。

今上帝に関しては、二人の皇妃しか確認できない。先に確認したように、外戚となる光源氏が今上帝の後宮を管理していたことが明確に描かれる。

以上のように、桐壺帝以外の帝は、母や外戚によってその後宮がかなり管理されており、外戚や大臣クラス以外の入内がか

なり難しかったことがわかる。空蟬の入内は、こうした外戚の影響を受けにくかった桐壺帝への入内であったからこそ成立する可能性があったのだ。また、娘を入内させることで一族の命運をかけようとした人々が多かったのが、桐壺帝の御世であるといえるのだ。

四、桐壺帝の御世

そもそも桐壺帝の御世とは、それほど身分が高いわけではない桐壺更衣を偏愛し、東宮までもうけた弘徽殿女御をはじめとする他の皇妃をないがしろにしているという異常な状態であることから語り起こされる。日向一雅氏は桐壺帝による桐壺更衣偏愛の理由を、「弘徽殿女御に代表されるような外戚的権勢を目指す勢力とは手を組まないことの意思表示であった」と指摘されるが、弘徽殿女御に対する扱いを考えると、日向氏の指摘するような一面があったといえよう。

一方で桐壺更衣は、亡くなった父大納言の並々ならぬ願により入内したことが描かれる。

かへすがへすつれなき命にもはべるかな。生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、た

だ、『この人の宮仕の本意、かならず遂げさせたまつた。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、かへすがへす諫めおかればべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに出だし立てはべりしを、

(「桐壺」一一三〇頁)

「我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな」という大納言の発言は、更衣入内が並々ならぬ一族の宿願であったことを感じさせる。なぜこれほどまでに大納言が更衣入内にこだわらなければならなかったのかは、明石入道によって「故母御息所は、おのがをぢにものしたまひし按察大納言の御むすめなり」〔須磨〕二二二頁と語られる桐壺一族と明石一族との血縁関係にある。桐壺と明石の関係については、秋山虔氏がこの一族が「帝と祖を一にする王家流に属するのであろうか」とし、村井利彦氏がこの一族や六条御息所の父大臣、夫故坊を含む一派が没落した「天下大乱」の可能性を指摘されることと関わりがあるといえよう。辻和良氏は、村井氏の指摘する陣容や対立図式には疑義を示しつつも、この一族の「皇統派」としての側面に着目され、桐壺帝の桐壺更衣、藤壺寵愛の背景に、「源氏」腹の男子による皇位継承への願い¹⁷⁾があることを読

み取っている¹⁸⁾。浅尾広良氏も桐壺帝の前に大きな皇統交替があった可能性を示唆されており、桐壺帝即位が順当に行われたものではなかったということが研究史において確認されてきている。

吉海直人氏は、桐壺帝が描かれざる裏面史をすべて見知っており、桐壺更衣寵愛の背景に氏族間の闘争史を読み取ることを意義を述べられる¹⁹⁾。同時に、桐壺帝が六条御息所腹斎宮を無理をして卜定し、養女格として取り込んだこと、最終的に六条大臣家の財産が光源氏に吸収されていることを読み取られている。皇親同士で扶助する関係が物語には描かれているが、「斎宮をもこの皇女たちの列になむ思へば」〔葵〕二二一頁という言葉の背景に、吉海氏が指摘するような氏族間の闘争を読み取るにより、この言葉はさらに重い意味を持つてくるといえる。

以上みてきたように、桐壺帝の後宮は、『源氏物語』内の他の帝と違い、多くの女性を抱えているという特徴を持つ。それは准拠の問題や、帝としての色好みの問題を含みつつ、その構成員が、桐壺更衣、藤壺と、その背景に桐壺帝即位をめぐる複雑な一族の思いを背負っていると考えられる女性達である点が注目される。さらに、桐壺帝への入内を検討されていた女性も

多く描かれており、皆父を亡くし没落しているという共通点を持つ。その没落の有様は、やはり桐壺帝即位時に亡き父たちが多少なりともかわっていたのではないかという可能性を想起させるものだといえよう。特にそのなかでも桐壺帝自らが入内について言及する空蟬は、桐壺帝にとって他の女性達よりもより気にかけるべき存在であった可能性があるのだ。

坂本共展氏は、空蟬の父の系譜を様々に想定されたうえで、空蟬と光源氏との間に血縁関係があったこと、そして空蟬が皇統の流れを汲むことを想定されている²³。後に空蟬の二条東院入りがなされていることを考えても、空蟬が皇統の流れを汲んでいるという可能性はまったく排除できるものではない。二条東院は、その構想上様々な問題を含むが、物語内の現実として二条東院に入った人物が花散里、末摘花という桐壺帝や皇統ゆかりの人物であったことは示唆的である。空蟬もまた皇統の流れを汲む可能性がありながら、父の思うにまかせない立身とその死により没落した女性であったといえるのではないか。

桐壺帝が空蟬の行く末を気にしたのは、入内を夢見る一族のひとつということだけではない空蟬の出自の問題があったといえよう。すなわち、空蟬の一族が桐壺帝即位の際になんらかの関わりがあり、没落していった一族、そして皇統の流れを汲む

一族であった可能性を示唆しているのである。

おわりに

空蟬の物語を含む帚木三帖は、成立論と関わり、多くの問題をはらんでいる。たとえば、加藤昌嘉氏・中川照将氏は「帚木」巻を含む「帚木十六帖」は、『源氏物語』第一部のなかで残り一七帖には影響を与えていないと指摘される²⁵。

一方で増田繁夫氏は、「帚木三帖は、当時の女性たちのあり方やその当面していた問題を、空蟬と夕顔という異なった性格の二人の女性によって形象しようとしたものであり、以下の物語はこの二人の原型に由来する問題を、さまざまな女性によって状況を変えながら繰り返し追求し、深め明確にしているというものといえるのではないか²⁶」と述べている。確かに成立の後関係は不明ではあるものの、仮に短編として成立したとしても、その影響がまったく他に及ばないということもまた考えにくい。

村井利彦氏は、桐壺更衣と空蟬について「父の死で「親のおきて」を果たせなかった女と、父が死んでも「親のおきて」を果たした女。二人の女は、その運命によって心理的に結ばれて

いるというべきである」⁽²⁷⁾述べられるが、この指摘は大変示唆的である。物語は桐壺一族の宿願のなかでの桐壺更衣の無念の死、明石入道の隱遁生活などを描きつつも、最終的には明石中宮による皇子誕生と、予測される皇子の即位とで、その宿願が果たされていく。そのように宿願が果たされていく一族がある一方で、宿願を持ちつつも、それが果たされことなく没落していく一族もまたあったのである。むしろそうした一族が大多数であったはずだ。桐壺更衣と空蟬は、それぞれ父の無念と一族の宿願を背負って入内を望むという同じ宿縁を持ちながらも、一方は男皇子をもうけ、一方は入内できずく受領の妻となるといふ、表裏の存在であったのである。しかもそれぞれの父の無念の背景には桐壺帝即位にかかわるなんらかのことがあったことが想定される。桐壺帝が空蟬のことを気にしていたことが描かれることは、空蟬の一族が、ただ没落しただけではなく、その没落と即位とが関係し、また、皇統の血を汲む一族である可能性を示唆させるものとして機能していたのだ。⁽²⁸⁾

空蟬と空蟬に関わる物語は、成立論の問題を含んでいるといえ、その表現は確かに他の物語内の事象とも絡み合い、桐壺帝の御世とはいかなるものであったのかという問題をも突き付けているのである。

注

(1) 本文の引用は新編日本古典文学全集『源氏物語』により、巻名・巻数・頁数を付す。なお、傍線等は適宜補っている。

(2) 衛門督の用例の内訳は以下のとおりである。

空蟬父——1例、左右衛門督——1例、頭中將の弟(左衛門督)——4例

衛門督(系譜外)——2例、柏木——20例、柏木弟——2例、夕霧子息——4例

尼君夫——2例

(3) 浅尾広良氏は、歴史上の内親王の入内と降嫁について検証され、「物語の文脈では更衣腹であることを理由に落葉宮を貶めている柏木も、歴史的に見れば、一条天皇の御代であっても相変わらず一世王と臣下との婚姻は禁止されたものであるから、更衣腹皇女とはいえ一世王(女二宮)を降嫁されたことは実は破格の待遇であったことが分かる」(『桐壺皇統の始まり——后腹内親王の入内と降嫁——』『國學院雑誌』第一〇九巻第一〇号、二〇〇八年一〇月)と指摘される。また、「天皇家の身内である源氏に降嫁するのと藤原氏に降嫁するのは、根本的に意味は異なる」とされており、薫との比較は注意が必要である。しかし、一方で柏木の祖父左大臣の例もあり、後述するように柏木の身分が低く描かれていることは間違いない。

(4) 家井美千子氏「右衛門督」「源氏物語」における——(『中古文学』第三六号、一九八六年三月)。

(5) 竹内正彦氏「あはれ、衛門督」考(『平成二七年度國學院大學公開古典講座 源氏物語「柏木」巻を読む 資料 二〇一五年」。

(6) ただし、桐壺更衣が更衣でありながら桐壺を賜っている時点で、更衣としては特別待遇を受けていることについては、すでに増田繁雄氏

- (9) 日向一雅氏「桐壺帝と大臣家の物語——準拠と話型構造論の観点から——」(『源氏物語の準拠と話型』至文堂 一九九九年 六九頁)。
- (10) 前川晃貴子氏「源氏物語」における「拒む女」たちの系譜——空蟬から朝顔の姫君、宇治の大君への連関——(『聖心女子大学大学院論集』第三四巻第一号 二〇二二年七月)。
- (11) 河内本系統の本文の中に「右のおほい」という本文を持つものがある(加藤洋介氏『河内本源氏物語校異集成』風間書房 二〇〇一年 三〇一頁)。
- (12) 秋澤互氏「中の品の女性たち」(『源氏物語の準拠と諸相』おうふう 二〇〇七年 三一—一頁)。
- (13) 歴史上の帝の皇妃については、「歴代皇妃表」(『平安時代史事典 資料・索引編』角川書店 一九九四年)を参照した。
- (14) 今井久代氏「延喜の帝と桐壺帝」(『源氏物語構造論 作中人物の動態をめぐる』風間書房 二〇〇一年 七頁)。
- (15) 服藤肇苗氏「王権と国母——王朝国家の政治と性」(『平安王朝社会のジュンター』校倉書房 二〇〇五年)。
- (16) 日向一雅氏「桐壺帝と桐壺更衣——親政の理想と「家」の意志、そして「長恨」の主題——」(『源氏物語の準拠と話型』至文堂 一九九九年 八四—八五頁)。
- (17) 秋山虔氏「桐壺帝と桐壺更衣」(講座 源氏物語の世界(第一集)「有斐閣 一九八〇年 一一頁)。
- (18) 村井利彦氏「桐壺の夢」(『源氏物語逍遙 村井利彦著述集』武蔵野書院 二〇一四年)。
- (19) 辻和良氏「桐壺帝の企て——『源氏物語』の主題的考察」(『源氏物語の王権 光源氏と「源氏幻想」』新典社 二〇一一年 五五頁)。
- (20) 注3と同じ。
- (21) 吉海直人氏「桐壺帝即位前史」(『源氏物語の新考察——人物と表現の虚実』おうふう 二〇〇三年)。
- (22) 春日美穂「源氏物語「朝顔」巻の光源氏」(『文学・語学』第二四号 二〇一五年二月)。
- (23) 坂本共展氏「源氏と空蟬」(『研究講座 源氏物語の視界三 光源氏と女君たち』新典社 一九九六年)。
- (24) 二条東院については、高橋和夫氏「二条院と六条院——源氏物語に於ける構想展開の過程について——」(『源氏物語の主題と構想』桜楓社 一九六六年)をはじめとして様々に論じられてきた。また、構想論とは一線を画し、物語内での二条東院についての論考も多くなされている(東原伸明氏「源氏物語の表現と深層テクスト——二条東院から六条院

(女御・更衣・御息所の呼称——源氏物語の後宮——」『源氏物語と貴族社会』吉川弘文館 二〇〇二年)や、高橋麻織氏「桐壺帝による

「桐壺女御」の実現——宇多朝から一条朝の史実を媒介として——」『文学研究論集』第二三三号 二〇〇五年五月)などが指摘されている。また、栗本賀世子氏は、女御昇進予定者として、殿舎を利用し、殿舎名で呼ばれる更衣の存在があったことを指摘されている(『殿舎名で呼

ばれる更衣たち——梅壺更衣から桐壺更衣へ——」『平安朝物語の後宮空間——宇津保物語から源氏物語へ——』武蔵野書院 二〇一四年)。

浅尾広良氏は、歴史上、父が亡くなった後に入内して女御になっている人物が複数いることを確認したうえで、桐壺更衣を更衣にすえおき、第

二皇子を賜姓源氏としたのは、光源氏を帝位に近づけるための桐壺帝の作為であったことを明らかにされている(『女御・更衣と賜姓源氏——桐壺巻の歴史意識——』『中古文学』第八一号 二〇〇八年六月)。

永井崇大氏「源氏物語——衛門督致——柏木論への視界——」(『古代中世文学論考』第一八集 二〇〇六年一〇月)。

坂本共展氏「明石姫君構想とその主題」(『源氏物語構成論』笠間書院 一九九五年 一六二頁)。

日向一雅氏「桐壺帝と大臣家の物語——準拠と話型構造論の観点から——」(『源氏物語の準拠と話型』至文堂 一九九九年 六九頁)。

前川晃貴子氏「源氏物語」における「拒む女」たちの系譜——空蟬から朝顔の姫君、宇治の大君への連関——(『聖心女子大学大学院論集』第三四巻第一号 二〇二二年七月)。

河内本系統の本文の中に「右のおほい」という本文を持つものがある(加藤洋介氏『河内本源氏物語校異集成』風間書房 二〇〇一年 三〇一頁)。

秋澤互氏「中の品の女性たち」(『源氏物語の準拠と諸相』おうふう 二〇〇七年 三一—一頁)。

へ」「源氏物語の思惟と表現 研究と資料—古代文学論叢第十二輯—」武蔵野書院 一九八八年、原岡文子氏「光源氏の邸—二条東院から六条院へ—」「源氏物語の人物と表現 その両義的展開」翰林書房 二〇〇三年、秋澤互氏「二条東院—越境の邸第としての試論—」「源氏物語を考える—越境の時空—」武蔵野書院 二〇一一年など。なお、今井久代氏は、二条東院入りしたあとの空蟬の援助を行い、小君が受領階級として光源氏との関係を保とうとした可能性を指摘している（『空蟬と小君』『人物で読む『源氏物語』第五巻—葵の上・空蟬』勉誠出版 二〇〇五年）。

(25) 加藤昌嘉氏・中川照将氏「『源氏物語』はどのように出来たのか?」を考えるために」(テーマで読む源氏物語論第四巻 紫上系と玉鬘系—成立論のゆくえ) 勉誠出版 二〇一〇年。

(26) 増田繁夫氏「帯木三帖と空蟬の意味—源氏物語の主題—」(『源氏物語とその前後 研究と資料 古代文学論叢第一四輯』武蔵野書院 一九九七年 一一—頁)。鈴木日出男氏も空蟬が長編的な女君たちの造型の原型であると指摘される(『空蟬物語の形成』『源氏物語虚構論』東京大学出版会 二〇〇三年)。高木和子氏は、「ことに初期の巻においては、個々の巻の状況は必ずしも次の巻と一続きでなく、ある独立性、完結性を保っている」「個々の巻を短編的に独立的に読むことと長編的な整合において読むことのせめぎ合いが、そこにはある」(『源氏物語における系図の変容—桐壺院の皇子達と朱雀朝の後宮—』『国語と国文学』第九一巻第一号 二〇一四年一月)と指摘される。お互いが影響しあいひとつの物語をなしている動態を考慮するべきであろう。

(27) 注(18) 一九頁。

(28) 今井久代氏は、空蟬の女房が「中將の君」という受領の後妻の侍女には過ぎた召名に着目すると、「中將の君」が入内を職増され愛育さ

れた過去を象徴」(注24 二七四頁) していると述べられる。これもまた空蟬の出目の確かさを物語る例といえよう。そうでありながら光源氏から後朝の文をもらうことすらない空蟬の有り様が際立つ。